

パトリック・ストークス  
『キェルケゴールのインターネット批判』

訳：的場 敦也

[ ] とローマ数字の文末脚注は訳者による挿入。

21世紀を生きることは、生活の大部分をインターネットで過ごすことである。我々がいかにして世界と向き合い、いかにして他者とコミュニケーションするのは、多かれ少なかれシームレスに日々の実存在existenceへ埋め込まれるという形で、ますます電子的に媒介されるようになっていく。インターネットは、もはや〔単に〕我々が訪問する場所ではなく、我々が世界中を動き回る方法の一部となっている。肉体を持つ実存在である我々のこの新しい側面は、新しい倫理的問題を投げかけてきた。オンラインでの行動や関係における存在論的・倫理的状态とは何なのか？ そしてそうした行動や関係は本当のものなのか？ 我々はオンラインの環境において他者とどのように関与すべきなのか？ 倫理的に真正で積極的に関与する人生というものはオンラインにおいて可能なのか、あるいは、インターネットは我々をみな、単なる傍観者へと変えてしまうのだろうか？

驚くべきことかもしれないが、キェルケゴールは、こうした問題について我々に何がしかを教えてくれる人物として、すでに何度も引き合いに出されてきた。今は亡きヒューバート・ドレイファス Hubert Dreyfus は、早くも2001年の彼の著作 *On the Internet* において、インターネット批判家の同業者として、キェルケゴールに関心を寄せ、遠い過去の間人であるこのデンマーク人が、新しく台頭しつつある形態のオンライン・コミュニケーションを目の当たりにしたならば、きっと我慢ならなかったに違いない、インターネット嫌いの気難し屋の同じ仲間と見なしたのである\*1。キェルケゴールは、オンライン時代の黎

\*1 Hubert Dreyfus, *On the Internet*, 2nd edn., New York, Routledge, 2008.

明期から、様々な形態のオンライン上の社交を「しっかりとした形のある「本当の」社交の、ほんやりした、欠陥のある反射以外の何物でもない」\*2と見なす学術的な電腦－悲観主義の一形態として徴用されてきた。しかしインターネットは成長をつづけて発展し、そのスピードは、哲学的分析の遅々とした作業をひっかき回している。それでは、キェルケゴールは今日のインターネットをどう考えるのだろうか、とりわけ、ソーシャル・メディアの倫理的危険と倫理的可能性について彼は何を語るのだろうか。

## 1. キェルケゴールの時代の科学技術上の文脈 ——そして現在の文脈

キェルケゴールの人生は電子コミュニケーションの黎明期と重なっている。このことは彼の著作に反映されている。1840年代に人々が目にするようになった電信 electric telegraph は、『死に至る病』（1849年）における、終末論的責任のアナロジーにおいて表れている。

人生を通して永遠性に至る旅路を歩む罪人の状況は、急行電車に乗って自分の行為、自分の犯罪から逃れてきた殺人犯の状況に似ている。ああ、彼が座っている座席、その真下には、電磁石式の電信 electromagnetic telegraph が走っていて、彼の人相と、彼を次の駅で捕まえるようにという指令を携えている。彼が駅について席を立つと、彼は逮捕される——彼は、自分への告発を、自分で携え、自分で持って行ったというわけだ。\*3

この逸話は、モールス信号が実際はどのように作用しているのかについて——1840年代後半には理解可能であったのだが——精通していないという点で

\*2 Karl Verstrynge, *Being and Becoming a Virtual Self: Taking Kierkegaard into the Realm of Online Social Interaction*, edited, 2011, Vol. 2011, p. 303, <https://www.degruyter.com/view/j/kier.2011.2011.issue-1/9783110236514.303/9783110236514.303.xml>, (accessed 2019-03-21t03:18:22.649+01:00).

\*3 SKS 11, 235 / SUD, 124. ホングは *elektromagnetiske Telegraph* を 'telegraph wires' と訳している。この翻訳はキェルケゴールには寛大であるが、おそらく、この新しい科学技術の理解の欠如をおおい隠している。

印象的である。この時から、キェルケゴールは、近代——まさにキェルケゴールがきわめて批判的である時代——の「大発見」(Opdagelser)<sup>\*4</sup>のシニフィアンとして、鉄道と並んで電信に言及している。キェルケゴールにとって、当代において、「コミュニケーションの速度は、優柔不断さののろさに対して反比例している」<sup>\*5</sup>。とりわけ、1854年のある日記では、以下のような厳しい批判が行われている。

それゆえ、なんとまあ当然のむくいであろうか、人類への嘲弄、この電信、吐き気を催すような、ほとんど日常に蔓延している虚偽は！ ああ、喜びたまえ、人類よ、君たちは電信を発明した。この時代にかくもふさわしい、そして可能な限り大々的な尺度で虚偽に適した発明をしたことを、誇りに思いたまえ。ローマ人が中傷者にCという文字の烙印を押したように、電信というものは、人類——汝ら嘘つきたち——に対する烙印なのである。<sup>\*6</sup>

キェルケゴールはすでに、世界が電子コミュニケーションと鉄道によってますます疾走しつつあることを理解することができた。しかし、彼はあまりにも早く死んでしまったので、正真正銘斬新な電信の影響が結実するのを見届けることはなかった。それでは、いかにして、彼は、インターネット・コミュニケーション時代に対する有益な批判家ないしこの時代への有益な案内者となりえるのだろうか。ここで私が提案したいことは、キェルケゴールがインターネット時代に有益な警告をもたらしてくれるように思われるのは、彼が電子の時代の始まりではなく、放送の時代の始まりにおいて執筆活動をしていたという限りにおいて、であるということである。この放送の時代において、彼は、人間のコミュニケーションが、均衡と互惠という規範的な領域からさまよい出ようとしているのを目撃したのであった。

---

<sup>\*4</sup> SKS 26, 123.

<sup>\*5</sup> SKS 8, 62 / TA, 64.

<sup>\*6</sup> SKS 26, 150 / JP 6, 531-2

我々は、新聞を「古い」テクノロジーと思いがちである。しかし、ある意味、新聞の到来は、放送の時代、つまり少数の生産者から多数の受動的な聴衆へと情報が高速で伝達されることによって特徴づけられる時代、の始まりなのである。対照的に、我々は放送の時代の終わりを生きているように思われる。伝統的な形態の放送はもちろん生き残るであろう、しかし、これらはますます〔新しいメディアと比べて、より〕非同期的な\*7ものになっていくであろう。放送されている番組を腰かけて同時一斉に見たり聞いたりする代わりに、我々は、個々別々に、見たり聞いたりする対象と時間を選択する——そして、一對多の放送のパラダイムは、もっと相互作用的な形態のメディアにどんどん置き換えられてきている。個人はいまやメディアコンテンツの単なる受動的な受信者ではなく、彼ら自身が再媒介者 re-mediator なのであって、コンテンツの制作者は、ソーシャル・メディアのアフォーダンス〔ソーシャル・メディアという形式そのものが持つ、再媒介行為を誘発するという性質〕の恩恵に浴している。また、ニュースメディアの相互作用機能は、現在は、以前よりもはるかに重要なものになっている。物語が作り出されるのは、読まれるためだけではなく、共有されコメントされるためでもある。しかし、これから見ていくように、放送的な新聞メディアに対するキェルケゴールの批判の多くは、驚くべきことに、このようにさらに相互作用的になった環境においてもなお、大いに当てはまっているのである。

## 2. キェルケゴールの古いメディアに対する批判

新聞メディアとのキェルケゴールのかかわりは学生時代にさかのぼるが、倫理的・精神的な生に対する新聞メディアの否定的影響は、1843年前後からずっとキェルケゴールの重要な関心事だったようである\*8。彼は「日刊新聞の圧政

\*7 確かに新聞は、ラジオやテレビといった放送電子メディアに比べると非同期的である。しかし、新聞は、それ以前に登場したメディアに比べれば、概して同期的である。言い換えれば、本とは違って、新聞は出版された日に消費されるのが典型的であった。

\*8 Nerina Jansen, 'The Individual versus the Public: A Key to Kierkegaard's Views of the Daily Press', in Robert L. Perkins (ed.), *International Kierkegaard Commentary: The Corsair Affair*, Macon, GA, Mercer University Press, 1990, p. 1.

は、あらゆる圧政の中でも、もっとも破滅的で、さげすむべきものである」\*9、「日刊新聞は近代世界における邪悪な原理であり、そして邪悪な原理であり続けるだろう」、「その詭弁性といったら際限がない、というのも、それはますます低俗な読者へと浸透し」、「あまりにも多くの汚らわしさや卑劣さを掻き立てるので、どんな国家でも手に負えないようになるからである」\*10と述べる。ジャーナリストの「無謀さや無神経さ」について語る際、1849年のある時にはこんな風にさえ述べるのである。

もし私が一人の娘の父であり、娘が誘惑されているとするならば、私は彼女に絶望したりはしないだろう。私は誘惑から救われることを希望するであろう。しかし、もし私に息子がいて、息子がジャーナリストとなり、しかも5年もそのままであったとするならば、私は彼を見離すだろう。\*11

メディアに対するこうした充ち溢れんばかりの敵意には、明らかに伝記的な起源がある。それは、1846年の『コルサー』紙との悲惨な確執に関係している。『コルサー』という風刺新聞は、大衆の代弁者として上流階級への風刺として登場したが、実のところは、中流階級のルサンチマンや俗物根性のための媒介物となっていた。この出来事は明らかに彼に傷を残し、そしてまず間違いなく、自らを「群衆」に対する「単独者」と見なす彼の見解を先鋭化させた。しかし、キェルケゴールの新聞メディア非難は、単なるルサンチマンや腹立ちまぎれの所業ではない。むしろ、キェルケゴールにとって、メディアは個人とより広い社会との間の本当に新しい形態の関係——統合され責任ある自己の持つ倫理的課題にとって有害であるような関係——を生み出すものであった。この後、公衆 public、匿名性 anonymity、均衡 proportionality という3つの題目のもとで、このことがどういう点で真実であるかを考察し、そしてこれらの題目に関するキェルケゴールの思想が、インターネット時代における現代の我々の

---

\*9 SKS 20, 33 / JP 2, 478.

\*10 SKS 20, 152 / JP 2, 479.

\*11 SKS 22, 422 / JP 2, 485.

状況にどのように適用可能かを議論していく。

### 3. 公衆 The Public

キェルケゴールのメディアに対する関心は、最終的には倫理的なものであるが、同時に存在論的なものでもある。著作家として、そして著作活動の理論家として、キェルケゴールは、話し手 speaker、聞き手 hearer、そして両者の間で伝達される中身である中間存在 in-between-being (mellemværelse) という3つの要素からなるコミュニケーション構造を鋭敏に意識していた<sup>\*12</sup>。著作家として、彼は、著者と読者の間にまさに適切な種類の関係性が生まれるための状況を設定することに特に熱心であった。しかし新聞メディアは、キェルケゴールの考えでは、公衆という新しい範疇を作り出すことによって、この存在論を揮発させてしまう。それによって、新聞メディアは適切な倫理的責任感を挫き、人間のコミュニケーションの根源的構造から逸脱する。

この批判の多くは、英語では主として『二つの時代』〔日本語では主として『現代の批判』〕の名で知られている、トマシーネ・ギュレンボア・エーレンスヴェア Thomasine Gyllembourg Ehrensvärd によって匿名で出版された小説への批評本の中で展開されている。この著作において彼は、彼が水平化と呼ぶ、すべての人間や意見、実践を、同じ水準の評価ないし認識価値へと引き下げようとする時代の傾向への批判を展開する。キェルケゴールの水平化に対する批判は、今日の民主主義の時代において、我々にはまったく疑わしく思われる仕方でも、少なくとも表面的には、明らかに反平等主義的なものである。しかしこの批判は、すべての情報源が共通の水準 level へと引き下げられている——そのことは、インターネットという構造に大いに起因している事実だが——我々の時代にとって、重要な響きを有している。情報は、その情報の信憑性や認識状態において本質的に差異が認められないような形式で入手可能である。それゆえに、一流の科学者による気候変動についての論文、つまり、知識生産において独自の仕方でも特権的な過程を経て生まれたはずの生産物が、気候

\* 12 Patrick Stokes, *Kierkegaard's mirrors : interest, self, and moral vision*, Basingstoke, UK ; New York, Palgrave Macmillan, 2010, pp. 47-8.

変動否定主義者のブログとまるきり変わらないマウス・クリック数になってしまうのである。我々のこんにちのポスト-真理の状況は、まず間違いなく、少なくとも部分的には、インターネットにおけるこの水平化の特徴と相関している。

しかし、キェルケゴールにとって、水平化に関する問題は、単にそれが見方や意見の均一化を推進するというだけでなく、これらの意見が帰属するまったく抽象的な統一体entity、すなわち「公衆」を生み出すことによってそうするということである。公衆は、「何か巨大なもの、抽象的な空虚、全てであり無でもあるような真空」\*<sup>13</sup>であり、そして同時に「あらゆる力にとっての最大の危険物であり、最大の無意味」\*<sup>14</sup>である。公衆は共同体や社会ではない。共同体は互恵的で具体的な関係、責任、敬意を有している。公衆は、対照的に、そのような内在的な責任、関係をいっさい有していない。他者とともに生きることが具体的な状況や共同体を生み出す一方、「公衆という存在は、何の状況も共同体も生み出さない」\*<sup>15</sup>、というのも、個人の間は何ら本当の同時代性はなく、ただただ抽象的な範疇への関係しかないのだから。代わりに、公衆は「積極的に個人や共同体を築き上げようとする類のコミュニケーションとの関係を阻害する」\*<sup>16</sup>。公衆は、キェルケゴール曰く、「滑稽にも参加者が第三者になることによって形作られる抽象的な集合物」\*<sup>17</sup>なのである。公衆は個人から成っているのではない、むしろ、公衆という範疇を通して個人は単なる傍観者となる。誰も個人として具体的で互恵的な行動の世界に関係しようとはしない、その代わりに見物人として世論という抽象的な範疇に関係する、それゆえ、道徳的・社会的な行動は不可能になる。公衆は行動しない、それ〔公衆〕は、それ自身が関与しない出来事を眺め、コメントするだけである。

この存在論はどの程度、新しいメディアに移し替えられるのか。一見する

---

\*<sup>13</sup> SKS 8, 88 / TA, 93.

\*<sup>14</sup> SKS 8, 89 / TA, 93.

\*<sup>15</sup> SKS 8, 87 / TA, 91.

\*<sup>16</sup> David Lappano, 'A Coiled Spring: Kierkegaard on the Press, the Public, and a Crisis of Communication', *Heythrop Journal*, vol. 55, no. 5, 2014, p. 783.

\*<sup>17</sup> SKS 8, 89 / TA, 94

と、ソーシャル・メディアとインターネット・コミュニケーションの相互作用的な性質によって、我々はケルケゴールが描いたものとはかなり違う局面に置かれている。放送メディアが、放送物の暗黙の視聴者として公衆を作り出すのに対し、限られた視聴者にだけに流される有線放送は、「公衆」への断片化〔という事態〕を示唆しており、一方でソーシャル・メディアは行為者ごとの直接的な個人的やり取りを用意している。さらに、膨大なインターネットインフラが、さまざまな体験についての個人の意見やフィードバックを提供するためにあてがわれている——実は、ケルケゴールはこの「あらゆるものへの批評」という可能性が台頭してくるのを、彼の時代において既に予見しているのだが。

新聞による評価 Evaluation by newspaper<sup>18</sup>は、徐々に拡大していった、夢にも見られなかったような対象にまで及ぶようになるだろう。先日、ある地方紙が以下のように報じている。ある男性が執行人 John Doe によって処刑された、彼は素晴らしい正確さでもって職務を遂行した。執行人 David Roe、彼は公の場で誰かを鞭打つためにいるのだが、彼もまた満足のいくやり方で職務を遂行した。<sup>\*18</sup>

しかしドレイファスは、ケルケゴールは、「世界中からの匿名の情報であふれていて、(……) 結論のないまま果てしなく、あらゆる話題について議論することができる」インターネットを、「新聞と喫茶店という最悪の装置のハイテク総合物 high-tech synthesis」<sup>\*19</sup>と見たであろう、と主張した。ドレイファスが解決の手掛かりにしている事例はブログ活動 blogging であるが、彼の言うことの大半はソーシャル・メディアにも当てはまる。我々は実は頻繁に「インターネット」というものを、ある新しい公衆へと具象化 reify している。もっともその新しい公衆は、相互に重なり合うサブ公衆 sub-public を持っているのだが。きわめて頻繁に、我々は、見解とか行動がこうしたサブ公衆に由来する

---

<sup>\*18</sup> JP 2, 487/SKS 18, 289

<sup>\*19</sup> Dreyfus, p. 77.

ものだと考えている。また、我々は、きわめて頻繁に、行為者としてのあらゆる関係性を、我々が消費し共有するものにゆだねるという形で、物語や写真、ミーム、ビデオを消費し共有するという傍観者の役割に没頭してしまっている。出来事は、キェルケゴールの言葉を使うならば、「自分では何一つ理解せず、何もしようとはしないこの不精な群衆crowd、今は歓待を受けたり、誰かのすることは全部ゴシップの種になるためにされているのだ」という考えに耽っていたりしたいこの見物人の公衆gallery-public」\*20のために憤慨とか、機知を表現するための単なる機会に過ぎないものとなる。傍観者として、相互的互惠性をなく奪われたことで、「群衆連合は、人々の生活に無関係な、とるに足らないことを一つに結合するというに基礎をおいている」\*21と、ネリーナ・ジャンセンはキェルケゴールの公衆観を要約している。

こういうわけで、メディアによって作り出された公衆についてのキェルケゴールの描写、つまり一世紀後に展開される見世物的な社会への批判を様々な点で予期するこの描写、にはいまなお、気味が悪いほどの的を射ているものがある\*22。

もし私がこの公衆を一人の人間として想像するならば（というのも、優れた個々人が一時的に公衆の一部となることがあるとしても、彼らは自らを安定させる統一的な関係性というものを、本質的に有しているはずなのだ——たとえ、彼らが宗教性の最も高い水準にまでは到達することはなかったとしても）、私は、きっとローマの皇帝の誰かを思い浮かべるだろう。彼はよく肥えて恰幅がよく、退屈に苦しんでいて、だから官能的で刺激的な笑いばかりを欲しがっているような人物である。というのも、機知という神からの賜物は、まったくこの世のものではないのだから。そしてこの人物は、邪悪であるというよりは不精であるのだが、積極性も持たずにふ

---

\* 20 SKS 8, 89-90 / TA, 94

\* 21 Jansen, p. 7.

\* 22 キェルケゴールの傍観者観については、以下を参照。George Pattison, *Poor Paris! Kierkegaard's Critique of the Spectacular City*, W. De Gruyter, 1999.

んぞり返りながら、色々なものを見るためにうろつきまわるのである。<sup>\*23</sup>

関与したり、投稿したり、共有したりする余地はたくさんあるにもかかわらず、インターネットによって作り出された公衆は、やはり〔従来の〕メディアによって作り出されたものと同様、行為者というより消費者であり、集団的行動へのコミットメントというよりは、気晴らしの必要にせまられて動かされているのである。

私が思うに、少なくとも部分的には、これはソーシャル・メディアの「注意経済attention economy」の仕組みの産物である。フェイスブックやツイッターのようなプラットフォームは、「いいねlikes」や「リツイートretweets」でもって利用者に報酬を与えることで、オンラインでのやり取りの焦点を、コミュニケーションの中身contentから、コンテンツcontent<sup>#</sup>の単位〔「いいね」や「リツイート」の数〕という人気へと移行させる。個人とメディア両方に由来するコミュニケーションは、その内在的な価値や重要性とは無関係に、最大の「クリック」を達成するために仕立てられる。「ヴァイラリティVirality〔直訳すると「ウイルス性」〕——まさにインターネット公衆が、それについて考えていることは無関係に、それにとって魅力的であるということだけの指標——は、それ自体が目的となる。こうした仕組みは水平化を生み出す。なぜなら、あらゆる情報とその内在的価値や重要性とは関係なく、「コンテンツ」へと引き下げられるからである。ドレイファスが言うように、「とるに足らなさ過ぎて含まれないものは何もない。特別な地位を要求するほど重要なものも何もない」<sup>\*24</sup>。ソーシャル・メディアの多くにおいて、とるに足らないもの、あるいは超現実的なものが、コミュニケーション帯域を占拠している。公衆の関心を引くものは、客観的に見て我々が公衆の関心事であるべきであると思うものからは、まったくかけ離れている。しかし、最終節で議論するように、これがオンライン公衆の倫理的価値に対する最終的な見解である必要はない。我々は、それどころか、インターネット・アフォーダンスが我々を水平化へ、無責

---

<sup>\*23</sup> SKS 8, 90 / TA, 94

<sup>\*24</sup> Dreyfus, p. 79.

任な公衆の発生へと追い込んでいくのを、克服することができるかもしれないのである。

#### 4. 匿名性

周知のとおり、ソーシャル・メディアは、頻繁に、しかもとりわけ残忍なやり方で、悪用が行われる場所である。「トローリングtrolling〔日本では荒らしや釣りなどと呼ばれる嫌がらせ〕」行為は、英語圏インターネットにおいても、多くの人にとって日常茶飯事となるくらいありふれており、また、生活をめちゃくちゃにしたり、死に追いやりたりするほど深刻でもある。時折、コメントーターや政策立案者らが、問題なのは、オンライン上で匿名で居続けられることであり、そのことで、人間の行為やコメントへの責任感が蝕まれていると示唆することがあった。それに応じるように、実名使用の方策を実施してトローリングを思いとどませようとする、フェイスブックのようなプラットフォームもある。こうした方策は、もし自分の実名をオンライン上で使用することを強制されると攻撃の対象にされるかもしれないと思う利用者グループによって、反対されてきた。さらに、トローリングがますます匿名ではなくなっていることを示唆する実証的なデータも出てきていて<sup>\*25</sup>、実名使用を強要しても、オンライン上の不正な振る舞いが減ることにはならなさそうである。しかしキェルケゴールは、匿名性の問題性は、突き詰めると、実名を使うかどうかという問題では全くないということを示唆している。

キェルケゴールが彼の時代のニュース・メディアの匿名性を非難したことは、驚くほど、偽善的であるのかもしれない。というのも、キェルケゴール自身、著作の多くを仮名 pseudonym で出版しているのだから。しかし、ここで重要なのは、匿名性という言葉でもってキェルケゴールが何を言わんとしたのか理解すること、そして匿名性が、彼が用いた類の仮名性と、そして今日ソーシャル・メディアで行われているような匿名/実名 anonymous/nonymous の使い分けと、その両者とどのような点で違っているのか理解しておくことであ

---

\* 25 Katja Rost, Lea Stahel, and Bruno S Frey, 'Digital social norm enforcement: Online firestorms in social media', *PLoS one*, vol. 11, no. 6, 2016.

る。キェルケゴールの仮名は、第一に、彼の著作の本当の著者を隠すためのものではない。彼はときどき編集者として著作に自らの名前を載せている、そして『結びとしての非学問的後書』の最後で、彼は、仮名が語り行っているすべてのことに対して、法的に責任を持つことを強調している。逆に、仮名の理由は、作家に由来する権威を保留することであり、だから、読者は自分が読んだ見解を単純にキェルケゴール修士に帰すことはできない。逆に、多才な人物たちに、それぞれ相互に相いれない人生観 (*livsanskuelser*) に読者を引き合わせることによって、キェルケゴールは読者に、こうした人生観に対する読者自身の関係を吟味するように要求している。本名を文章に記すことなしに、著者は一貫した人生観を、実存在に対する、整合的で人格的に責任のある見通しを提示することができる。実際、キェルケゴールの『二つの時代』批評は、一貫した人生観を提示しているとしてこの小説の匿名の著者をほめたたえているが、それとは反対に、彼は初期には、小説『しがないヴァイオリニスト』にはそうした一貫した人生観が欠けているとして、その実名著者ハンス・クリスチャン・アンデルセンを批判していたのである。

キェルケゴールが不平を抱いていた匿名性——それは、実際、彼の時代においてほとんど「警句的意義」\*26を有していると彼が考えていたのものなのだが——は、このように、その人の本名を用いるかどうかという問題ではなくて、コミュニケーションが伝達者の感覚によって満たされているかどうかという問題なのである。コミュニケーションは根本的には、そして正しくは、人格の間のものであるが、新聞メディアの匿名性は、コミュニケーションが非人格的になってしまった状況\*27、つまり、人格の間のコミュニケーションの強固な感覚が欠けてしまった状況の症状であり、その状況を悪化させるものなのである。キェルケゴールの主張によれば、当時のコミュニケーションの多くは、実名が使われているときでさえ、まさしくこの強固な感覚を喪失しているのである。

人々は匿名でものを書くだけでなく、匿名で署名を上書きしたりもする、

\* 26 SKS 8, 98 / TA, 103

\* 27 Pap. VIII.1 A 540

そう、匿名で話しもする。(……) 現在、人々と話すことはむろん可能である、そして彼らの言うことは確かにとても賢明である、しかし、会話はどこか匿名で話しているかのような印象を与えるのである。(……) しかしこうした発言をぜんぶ足し合わせてみても、例えば話すことは限られてはいても本当に話している、きわめて単純な人間によってすら可能な人格的な人間的談話にさえ、届くことはない。<sup>\*28</sup>

匿名で話をする人と話すことは、彼らの語りには、キェルケゴールが別の箇所「真面目さ earnestness」ないし「真剣さ seriousness」(*alvor*)、意志された行動を単なる習慣から区別する、「心情の<sup>iii</sup>、獲得された根源性」<sup>\*29</sup>と呼ぶ固有性質が欠如していることを示唆している。真剣さは口調の問題ではなくて、自分が語り行うことに対する、一人称的かつ反省的な所有者意識と当事者意識に関する問題である。現在の匿名性は、間違った名前や無名で出版する人格に関することではない。つまり問題なのは、どんな名前<sup>ii</sup>で現れようと、それが、しばしば、まったく一人の人格ではないということである。実際、キェルケゴールは——この引用は、薄気味悪いほどに〔今の〕Google 時代を連想させるものであるのだが——以下のように付言している。

ドイツでは、恋人のための手引書すらあるのだ。すると最後には、恋人たちが腰をかけ、お互いに匿名で話をするという事態にまで、おそらく行きつくであろう。あらゆるものに手引書がある、そして、いまに、そうした手引書での所見をまとめた大なり小なりの必携本を丸暗記するのが教育だというのが、普通のことになるのだろう。そして人々は、ちょうど植字工が文字を拾い上げるように、特定の所見を拾い上げていく技能が上達するのに応じて優れているということになるだろう。<sup>\*30</sup>

<sup>\*28</sup> SKS 8, 98 / TA, 103-4

<sup>\*29</sup> SKS 4, 448 / CA, 149

<sup>\*30</sup> SKS 8, 99 / TA, 104

匿名性についての問題は、単に、所与のコミュニケーション行為に身元確認可能な人格が実際に結び付けられていないということではなく、コミュニケーションが非人格化されたものになるという、もっと根深い問題なのである。新聞メディアは、まさにそれが真面目に自分自身をある見方〔人生観〕にコミットさせることに伴う危険を弱めることによって、こうした真面目さの欠如を助長するのである。真面目さにおける危険は、間違った人生観を持つということではなく、その人が持っているありとあらゆる人生観（確約をする、立場を明確にする、そうすることで嘲笑やもっと悪いものを引き寄せるといった人生観）から、切り離されることである。真面目さを減衰させることについての新聞メディアの貢献は、ケルケゴールの見解では、「同じことを言って同じ価値判断をする人はたくさんいるのだ——だって新聞に印刷されているってことは、それだけでもう十分その保証になっているのだから——という、それが与えてくれる墮落した保証」\*<sup>31</sup>である。

この危険は、ソーシャル・メディア利用者が実名使用を強制されるかどうかにかかわらず、オンライン時代にも残されている。問題は、実名の利用者さえもが本質的に匿名の方法で、つまり真剣さ *alvor* を欠いた方法で、談話に参加することができるということである。構造的に、ソーシャル・メディアの仕組みは、人間の関係と応答の多様性を壊し、限られた出来合いの選択肢に狭めるものである。誰かがあなたの「友だち」であるかそうでないか、誰かがあなたをフォローするかそうでないか、あなたのプロのネットワークにいるのかそうでないか、などなど\*<sup>32</sup>。あなたはツイートが好きかそうでないか。フェイスブックは6つの異なる「反応」を提供している、でもその中に「嫌い dislike」はない。「ミーム memes」は特にどこか特定の場所から現れてきたわけでもない、そしてそれらを共有する際、我々は暗黙裡に、背後に現実の起点を持たず、著者もいないようなコンテンツのための導管となっているのである。

\*<sup>31</sup> SKS 22, 62 / JP2, 484

\*<sup>32</sup> Danah M Boyd, 'Friendster and publicly articulated social networking', 2004; Shanyang Zhao, Sherri Grassmuck, and Jason Martin, 'Identity construction on Facebook: Digital empowerment in anchored relationships', *Computers in human behavior*, vol. 24, no. 5, 2008.

要約すると、ソーシャル・メディアは表現の新しい機会を作り出してきた一方で、暗黙裡にこのコミュニケーションの中身を、具体的で責任ある個人の代わりに匿名の公衆のものにしてしまい、これらの表現でもって、表現を容易に非人格化してしまうような様々な形態への道を切り開くようにも作られているのである。

## 5. 不均衡なコミュニケーション

キェルケゴールのメディアに対するもう一つの批判は、コミュニケーションが行われるときに想定されるはずの規範的な人間的尺度を、メディアはどういうわけか破ってしまうということである。キェルケゴールは日記で、「神はまさに、ひとり人間に、自らの隣人と、そして多くとも数人の隣人たちと、個々別々に話をさせようとした」、そして、新聞メディアのような仕組みを用いて、膨大な数の人々と一度にコミュニケーションするのに成功するほどの才能を与えられた人は、本当に限られたごく少数の人間だけである、と断言する。新聞メディアは、人々が「ナンセンス以外何もコミュニケーションすることがない」状況を作り出し、「不均衡」(*uproportioneret*)な形態のコミュニケーションへのアクセス権を、「不器用者たち」に授けてしまうのはほとんど避けられないのである<sup>\*33</sup>。政府は、ちょうど個人が危険な武器を手に入れるのを禁止するように、日刊新聞が「あまりにも巨大すぎるコミュニケーション手段」<sup>\*34</sup>になるのを禁止することになるかもしれないとまで彼は言う。そして、特に我々のインターネット時代を予見するかのような例を彼は書き添えている。

誰かが新しい装置を発明したのを想像してみしてほしい。その装置は、小さくて便利な通話管で、それを使えば世界中のことを聞くことができるのである。私は、警察が、それが使われたなら世界中の国々が精神的にかき乱されてしまうかもしれないと考えて、それを禁止したりしないだろうか、

---

\* 33 SKS 20, 156 / JP 2, 480

\* 34 SKS 20, 152 / JP 2, 479

と思うのだ。銃は、確かにそういう考えで禁止されている。<sup>\*35</sup>

ケルケゴールがこうした仮想のおしゃべり拡声器のことを言うのは、ここだけではない。別の日記記述で彼は、話者の個人性を蒸発させ中身を公衆へと配置換えしてしまうようなやり方を、この形態の放送の物質的な構造に結び付けている。

もし誰か話をしたいと思う人が、国中に聞こえるくらい音が響くおしゃべり拡声器を持っていたとするなら、たちまち彼は、自分は一人の人間ではなかった（そうではなくて、もっと大きなもの、例えば時の声とかいった抽象物なのだ）、そして彼は個人と、個々の人間と話をしていたのではなくて、全世界（例えば人種といった、抽象物）と話をしていたのだ、という印象を作り出すだろう。印刷技術の発明と特にその発達と共に。<sup>\*36</sup>

ここで言われているコミュニケーション不均衡には2つの意味がある。第一に、個人である話者と、多数である聴衆という不均衡に、ケルケゴールは人間的なコミュニケーションの目的とは正反対のものを見出しているようである。ケルケゴールは、彼の本の多くを「私が喜びと感謝の念をもって私の読者と呼ぶ、かの単独者」に捧げている。これは、彼の元婚約者レギーネ・オルセンへの間接的言及であると同時に、読者をふるいにかけて、「読者公衆」という不確かな存在論的範疇のみ込まれることなく、本文に直接かかわろうとしている個人を選び出そうという試みでもある。コミュニケーションは、ケルケゴールにとって、人格間での遭遇の中で発生するはずのものである。一方で放送メディアは、このコミュニケーション的遭遇の発生場所である互惠性を揮発させ、それによってその再帰性も揮発させるのである。

そして、インターネットによって媒介されるコミュニケーションに関する、今日の多くの不安からすれば、馴染みのある関心が、ここに見出される。つま

---

<sup>\* 35</sup> SKS 21, 144-5 / JP 2, 483

<sup>\* 36</sup> JP 1, 278/SKS 27, 400

り、それが何がしか「本当の」コミュニケーションではないということである。ドレイファスは、オンライン上でのやり取りで得られた遠隔的臨場感 telepresence というものには、重要なある現象的特徴——例えば、誰かと身体が共在しているときには生じる傷つきやすさ〔向かい合っている対象は傷つきやすい存在なのだという感覚〕——が欠落しているということを論じることで、この主張についての明確な具体例を提示している\*<sup>37</sup>。以下で議論するように、私は、**同時代性 (samtidighed)** というケルケゴールの概念によって、我々は遠隔的臨場感の場合におけるこの感覚の欠落を克服することができると考えている。しかし、ケルケゴールがここで関心を抱いていたのは、日刊新聞と関係する特定の媒介形態が、聞き手が存在論的に拡散されているというまさにその理由によって、この種の共在を困難なものにするということである。書き手と読者は、人格間でのコミュニケーションが不可能になってしまうくらいたくさんの人に一度に簡単に送信できるという、いわばメディアの物質的特徴によって、切り離されている。

第二に、ケルケゴールは、コミュニケーションの**中身**が報道される際の尺度からすれば価値を持たないという点で、新聞メディアは不均衡なコミュニケーションを伴うと考えている。ケルケゴールは、つまらないことに焦点を当てて人間を破壊するに至らしめる新聞メディアの実例を挙げている。こうした実例は、今でもかなりなじみ深く思われるであろう。

コミュニケーション・メディアの不均衡に注意を向けなければならない。例えば、若い少女について（しかもフルネームで——そして言うまでもなく、それは本当のことである〔本名である〕）、彼女は新しいドレスを手に入れたと、印刷して知らせることによって（そしてこれは本当のことだと見なされる）、そしてこれを何度か繰り返すことによって、その少女を生涯にわたって不幸にすることができる。しかも、たった一人の人間がこのことを5分間で生み出すことができるのだ。それはどうしてか？なぜなら新聞メディア（日刊紙）は不均衡なコミュニケーション・メディアだから

---

\*<sup>37</sup> Dreyfus, p. 69.

である。<sup>\*38</sup>

我々はこの例を、セレブ達のとるに足らない生活の詳細を扱うのに躍起になり、面白いけれどももうわべだけの物語ばかりを伝えている今日のメディアに、容易になぞらえることができるだろう。それゆえ、キェルケゴールは、新聞メディアは「その流布の力によって、純粹にかつそれ自体で悪である」、そしてこの力がメディアに、「例えば、1マイル四方の土地に十字に鉄道を引くようなことをすれば、それは、無茶苦茶で、人々の利益になるどころか、すべてを混乱させてしまうであろうが、それと同じように、社会を精神病院へと変えてしまいかねないようなある種の狂気」<sup>\*39</sup>につながる不均衡を与える、と述べる。一人の少女がドレスを買ったという特に害のない物語を公表することが、「少女への殺人未遂にまで至って、彼女を死に追いやるかもしれないし、彼女から正気を奪うかもしれない」<sup>\*40</sup>という主張は、話題に不相当で不均衡な方法によって、唐突かつ破壊的なほどの評判なり悪評なりを与えることがあるというソーシャル・メディアの様式と、かなり共鳴する部分がある。〔インターネット上の〕ミームが「ウイルス性になる go viral」、それによって現実の人間が一掃されてしまうことがあるが、これはまったく馬鹿げている。実際、キェルケゴールはとるに足らないことを（実存在の美的側面の鍵となる特徴であると同時に）公衆の注意を引き付ける目印としている<sup>\*41</sup>。確かにキェルケゴールは、コルサー紙がとるに足らないことを肥やしにして、しかも何らかの形で、さらに広範囲にわたってデンマークならではのとなるような仕方で、成功したと考えていた<sup>\*42</sup>。

別の場合には、この不均衡は楽しませるといふよりむしろ苦しめるような諸形態をとる。特によく見られるのは、パイル・オン pile-on という現象である。この現象は、ソーシャル・メディア上で、誰かのコメントや振る舞いに対する

<sup>\*38</sup> SKS 21, 144 / JP 2, 482-3

<sup>\*39</sup> SKS 25, 428 / JP 2, 490

<sup>\*40</sup> SKS 25, 428 / JP 2, 490

<sup>\*41</sup> see e.g. Stokes, p. 23.

<sup>\*42</sup> Jansen, p. 11.

批判が殺到することである。こうしたコメントや振る舞いは、もともとはふさわしかったとしても、個々の声が非常に多く関与することによって、均衡を失い、危険なほどゆがめられてしまう。「コールアウト・カルチャー」call-out culture の批判のすべてが有効なものであるわけではないだろうが、それでも、インターネットがしばしば危険なほど不均衡な結果を産み出しているというのは事実なのである。そうした不均衡な結果は、キェルケゴールが語るドレスを買った少女の悲劇がそうであるように、まさにキェルケゴールが批判する、新聞メディアにおける桁外れのスケールの結果なのである。

## 6. 肯定的な展望？

ここまでの我々の議論からすると、キェルケゴールのインターネットに対する道徳的評価は全く否定的なものであると思われるかもしれない。ここまでの話では、ソーシャル・メディアは新聞メディアの倫理的に最も危険な特徴を継承している。それは無責任にも「公衆」、つまりみずから責任をもって行動を起こす代わりに、受動的に情報を吸収し再媒介するだけの公衆、という隠れ家に人々を誘い、さらに、人々を馬鹿々々しさに巻き込み、人々を本当の危険にさらすというふうにして、その桁外れのスケールによってコミュニケーションを墮落させる。新聞メディアは「単なる抽象的な融解によって」読者をつなぎとめていて、「(……) そうした融解の中で、個人の反省や人格的自発性が、減ぼされるか、そうでなければ妨害されている」\*<sup>43</sup>のであるが、まさにそれと同じようなことはインターネット、特にソーシャル・メディアでも起こっている。しかし、キェルケゴールは、非個人化する公衆の構築という点で彼の時代を批判していた一方で、時折、遠回しとはいえ、社会における個人同士の積極的な関係性の展望も提示している——そしてここに我々は、インターネットの「不均衡なコミュニケーション」によって特徴づけられる世界のもっと肯定的な展望が達成されるかもしれない場所を見出すことができるであろう。

キェルケゴールのメディア批判は、明らかに、非個人化する集団主義批判の——それゆえ1848年の民主主義改革への批判の——一部分である。文学研究に

\*<sup>43</sup> Verstryngge, p.316.

においては、デーヴィッド・ラッパノが要約しているように、キェルケゴールは「19世紀ヨーロッパにおける自由化の動きを見落としており、そして集合的な生や集团的行動が肯定的な社会的結果を生みうるという可能性を全く認めていない」\*44という想定が一般的である。キェルケゴールは、行為は根本的には個人の仕事だと考えている。それゆえ、公衆へと取り込まれるのは、行為に対して傍観者であること以外の何物でもない。彼の時代へ矯正剤を与えようとする者として、キェルケゴールは第一にこの否定的な点を強調するのに関心を持つ。しかし、キェルケゴールにおいてはしばしばそうであるように、否定的な記述によって、我々は肯定的な描写もはっきり認めることができるのである。このことを、『二つの時代』から考えてみよう。

単独者は、世界全体に惑わされずに倫理的な態度を持つようになって初めて、その時初めて、真に結びつくということを語ることができる。そうでなければ、一人一人では弱い人間の結びつきは、子供の結婚のように醜く墮落した連合になる。\*45

群衆に対抗して個人性の必要性を強調する一方で、キェルケゴールは共同体的行動の可能性に触れている。これは、人々が、群衆や公衆といった抽象的範疇にのみ込まれるのではなく、自己自身として、対等の理念に関係するとき、初めて可能になる。

諸個人（特におのおのめいめい）が、本質的に、情熱的に、理念へと関係し、その後、結びつきの中で共に同一の理念へと本質的に関係する時、その関係は最適で正常なものになる。その関係は個人個人に関しては、引き離すものであり（各人は自己自身のために自己自身を有している）、そして、理念的には結びつけるものである。（……）こうして、個人個人は、群衆的な意味でお互いに近づきすぎてしまうということとはなくなるのであ

---

\* 44 Lappano, p. 783.

\* 45 SKS 8, 100-01 / TA, 106

る。それは単純に、彼らが理想的な距離を基にして結びついているからである。<sup>\*46</sup>

それゆえ、メディアによってもたらされた高度に反省的な時代状況の下でもなお、真正な共同体や、真正な集団的倫理的行為は、各人が倫理的なものの内容に対する自分自身の関係に注意を払い、自己反省的な態度を取るならば、可能なのである。

新しいメディアの時代への示唆は何だろうか。一つの答えは、このメディア固有の危険性を勘案してもなお、新しいメディアの相互的可能性は、集団的行動も含む、真に道徳的な行動の範囲を広げるかもしれないというものである。キェルケゴールは、アゴラに集い、議論し、決定することができた古代のポリスとは違って、現代の、新聞メディアによって媒介された公衆は集うことができないということを、明敏にも見抜いている<sup>\*47</sup>。しかし、もし我々が匿名のコンテンツやコメントの単なる導管となって重要な諸目標に対して、我々の人格的な関係を失うというようなことがないような仕方ですれらの目標に関係するならば、日刊新聞が存在しなかったとキェルケゴールが思っていたようなやり方で、インターネットは彼にとって償還可能かもしれない。実際、ここで我々は、ソーシャル・メディアが、少なくとも表面的には、新聞メディアとは違って、ユーザーを個人化するという点を活かせるかもしれない。オンライン上での我々は、各人が（実名であろうとなかろうと）一つの名前であり、一つのアバターであり、絶え間なく変化する関係と忠誠 allegiances のネットワークにおける一つのノードである。このことは、我々が個人的で、倫理的で、実践的な所有権 ownership を持つ場所を提供する。我々は、ソーシャル・メディアのプロフィールを、ドレイファスがおそらく想定したような単なる気晴らしの場所ではなく、世界と向き合い折り合いをつける場所として見ることもできる。しかし、これを実現するためには、きわめて特別な態度が必要であろう。

ラッパノは、「そのそれぞれが誰かある人である、現実の諸人格との、瞬間

<sup>\*46</sup> SKS 8, 61 / TA, 62-3

<sup>\*47</sup> Lappano, p. 785.

の現実性と現実的な状況における同時代性 (*samtidighed*)」をキェルケゴールが熱心に説いていることに注目している\*48。しかし、同時代性 *samtidighed* は、私が以前論じた\*49ように、キェルケゴールにおいては神学的かつ現象学的な概念であり、経験によって得られる、他者との想像上の共在の感覚である。我々は、歴史的・地理的出来事によって同時代的なのではない。我々は、例えば聖書で描かれるような歴史的に離れた出来事に対しても同時代的になることができる。我々は、我々が他者や状況を体験し、そうして自らの規範的な要求を人格的に作り出していくことによって、同時代的になるのである。我々は、我々を真剣さや行為へと呼び立てる状況に対して、同時代的になる。

同様に、我々は他の人間存在と関わる人間存在であるという事実は、コミュニケーションの完全性を保持するうえで極めて重要である。もし我々が他の人間存在と話しているということをおぼろげに忘れてしまったら——我々が自分の聴衆を「インターネット」（あるいは、おそらくはもっとプラットフォーム-特有なもの、例えばツイッター）と見なすとき、知らず知らずそうなり得るのだが——、我々は、コミュニケーションの実在性の深さを失い、それによって倫理的具體性への接触も失うだろう。実際、我々は、オンライン上で遭遇する多くの悪用は——決してその全てではないが——、いわば、人格間のコミュニケーションからのこの種の抽象、つまり、アバターの背後にある（レヴィナスの意味での）顔を見失う抽象、に過ぎないように思われる。単に実名を使うだけではうまくいかない、そうではなく、他のユーザーを、まったくキェルケゴール的な意味で、本物の同時代人と見なすことで、うまくいくかもしれない。

仮名出版のための新しく創造的な用法を見出す特異な技巧を持っていた作家キェルケゴールは、もし機会があったなら、ソーシャル・メディアを使って、魅力的で高度に独創的なことをしたかもしれない、と想像するのは難くない\*50。彼は、新聞メディアに対してそうであったように、批判的であったであ

\* 48 SKS 8, 87 / TA, 91

\* 49 Patrick Stokes, *The Naked Self: Kierkegaard and Personal Identity*, Oxford, Oxford University Press, 2015.

\* 50 これがどういうことは、@kimkierkegardashianを通して、ほんの少し垣間見ることができるとも思われる。@kimkierkegardashian は非常に注目すべきツイッ

ろうことは間違いない。しかしそれでもやはり、キェルケゴールは新聞紙上で自分の意見を公表してもいたのだ。もし我々も、オンライン時代の並外れたアフオーダンス——開放的で倫理的・政治的な潜在能力、人々を結び付け、組織化のためのプラットフォームを提供してくれるという可能性、などを含む——を活用しようとするなら、我々は、キェルケゴールの批判によって可視化された、ソーシャル・メディアの構造に組み込まれた障壁に対抗して、能動的に活動する必要があるだろう。それは、次には、キェルケゴールが我々にそうしてくれたであろう通りに、我々自身を具体的存在と見なす努力を必要とするだろう——そう、我々に対して猛烈な倫理的な要求をするような状況において他の具体的存在と交流する、そんな具体的存在として。インターネットはなくなならない。インターネットが課すその倫理的試練は、新しくも、恐ろしいほど身近なものになるだろう。デジタル時代においてよく生きる術を知る際、キェルケゴールを手引きにするのはそれほど悪いことではないかもしれない<sup>\*51</sup>。

Patrick Stokes, Associate Professor of Philosophy, Deakin University

訳者：的場敦也（京都大学大学院博士後期課程）

- 
- <sup>i</sup> デンマーク語は Blad-Critiken であるから、evaluation by newspapers ではなく、critique by newspapers 「新聞による批評」と訳すべきかもしれない。
  - <sup>ii</sup> content が「物事の実質・内容」を意味しているときは「中身」と訳し、単に「中身を埋めるもの」ということを意味しているとき、つまり中身を埋めているという形式性が強調されていると思われるときは「コンテンツ」と訳した。
  - <sup>iii</sup> 原典で該当する箇所は“Alvor er Gemyttets erhvervede Oprindelighed”である。Gemyt は英訳では disposition 「気質、性癖」となっているが、Gemyt はドイツ語の Gemüt にあたる単語がデンマーク語に輸入されたものである。また前後の部分を「気質」と訳すと意味が通らないことも考慮すると、デンマーク語での本義にしたがって「心情」と訳した。

---

ター・アカウントであり、極めて効果的にキェルケゴールからの引用をセレブであるキム・カーダシアン Kim Kardashian からのテキストでグシャグシャにすりつぶしている。彼女のツイートは今では著作として出版されている。

<sup>\*51</sup> この論文は、2019年7月に、京都で開催された日本のキェルケゴール協会20周年記念のイベントで発表されたものである。この集会で講演する機会を与えてくれたキェルケゴール協会に深く感謝いたします。